
ドクタダレムシの糸

電球

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドクタダレムシの糸

【Nコード】

N7359X

【作者名】

電球

【あらすじ】

あるとき、一匹のドクタダレムシがお釈迦様に言いました。

「お釈迦様、今日は一つお願いがあって参りやした」

「ほう、なんだい？」

お釈迦様は穏やかに訊ねます。

あるとき、一匹のドクタダレムシがお釈迦様に言いました。

「お釈迦様、今日は一つお願いがあつて参りやした」

「ほう、なんだい？」

お釈迦様は穏やかに訊ねます。

「実は先週くたばった大泥棒カントタの事でやんして風のうわさで聞きやしたよ。

野郎、天国に飛ばされたつていうじゃないですか」

カントタのことをお釈迦様は覚えていました

カントタは泥棒でした。

しかし金持ちから盗んだお金を貧しい人に配るような義賊だったために、

お釈迦さまは彼を天国へ住ませることにしたばかりでした。

「あいつはとんでもない悪党ですよ。

なんせ、あつしに引導を渡したのはあいつでやんす」

お釈迦様は驚きました。

カントタは虫一匹殺すのもためらうような絵に描いた善人だったからです。

急いでカントタの悪行履歴書を調べなおすと、確かにこのドクタダレムシを踏み潰したという報告が載っていました。

お釈迦様はしまったな、と思いました。
カントタの天国行きの判定をくだしたときに
すっかりこのページに目を通していなかったのです。

「あつしが地獄行きなのは合点がいくでやんす。
なんせ、あつしは生前、女子供年寄り問わず、いろんな人間をカブ
れさせてきたもんで。

しかしカントタが天国行きなのは、あつしは納得できないでやん
す。

お釈迦様にこんなことを言うのは大変恐縮でやんすが、
カントタはあつしと同じく地獄に落ちるべきでやんす」

お釈迦様は考え込んでしまいました。

たしかに、ドクタダレムシの言い分にも一理あります。

そこでお釈迦様は天国に居るカントタを試してみることにしたので
した。

天国で幸せに過ごすカントタの目の前で、いきなり地割れが起こり
ました。

地割れは人一人がやっと通れるほどの小さな亀裂でしたが、とても
深く深く続いておりました。

きつと、地獄まで続いているに違いない。

そう思ったカントタは、ふと、あるものに気がつきました。

地面の亀裂の端に、毒々しい紫色のロープのようなものが括り付け
てあったのです。

カントタははっとしました。

ああ、ひよつとすると、これはあのドクタダレムシの吐き出した糸じゃないか？

彼はドクタダレムシを踏み潰したことを思い出し、後悔の念に襲われました。

○

むかしむかし、彼がまだ生きていたころ、
たまたま通りかかった道の真ん中に一匹のドクタダレムシが転がっていました。

ドクタダレムシはその名の通り、全身から毒を出す厭なイモムシです。

もしも子供が手に取ったりしたら危ない、
そうおもったカンタタはドクタダレムシをわきの草むらに蹴飛ばしました。

しかし、しばらくするとそのドクタダレムシは草むらから這い出てきて、

あろうことが元居た道の中央に寝転がりました。

カンタタはまた、そのドクタダレムシをわきの草むらに蹴飛ばしました。

しかし、無駄でした。

ドクタダレムシはまた這い出てきて、道の真ん中に寝そべるのです。

本当に、厭な虫です。

困ったカンタタはとうとうそのドクタダレムシを踏み潰して殺してしまっただけです。

○

タンタタは理解の早い男でした。

そうか、あの時のドクタダレムシが自分を地獄へ招いているのだな。カントタは観念しました。

たしかに、あの時のドクタダレムシに自分は酷いことをした。自分は罪を償う必要があると思いました。

ドクタダレムシの系に手をかけ、地獄へ落ちようとしたとき、カントタを止める人物が居ました。

その人物もまた、天国の住人でした。

彼は言います。

その系で地獄に落ちるのは自分である、と。

その人物もまた、生前自分が犯した罪に自責の念を抱いてたのでした。

彼とカントタが、地獄に落ちるのは自分だと主張し合っていると、大勢の人物が議論に加わってきました。

彼らは皆、同じ主張をしていました。

自分こそ地獄に落ちるのにふさわしい人間である、と。

天国は地獄と違い、善い人間がたくさん居ました。

彼らは、過去に自分の犯した些細な罪に心を痛める日々を送り、地獄へ行きたがっていたのです。

地割れのそばには、いまや大勢の天国の住人が集まっていました。カントタは系を掴んだ手を見せて一喝しました。

見ろ、カブれたこの手を。

これはドクタダレムシの系である。

私は生前、ドクタダレムシに酷いことをした。

この系は私専用に与えられた系であり、お前たちに使わせる訳にはいかない。

そんなこと関係あるかと大勢の天国の住人が大挙して系に押し寄せてきました。

カンタタは糸を渡すものと激しく抵抗しました。
ぷっん。

人々があちこちに糸を引つ張ったせいで、糸は切れてしまいました。
同時に地響きがなり、地割れはぴたっとくっ付いて塞がれてしまいました。

カンタタはもう地獄へいけなくなったと、泣いて悔しがりました。

はるか天界からこの様子を見ていたお釈迦様はドクタダレムシを下がらせました。

そして、次の陳情者を呼びました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7359x/>

ドクタダレムシの系

2011年11月15日15時36分発行